

# 哲學研究

第四百四十八號

第十三卷  
第七册

自己自身を見るもの、於てある場所と

意識の場所

西田幾多郎

我々の概念的知識の中に入り来るものは、皆同様の意味に於て入り来るのではない。即ち我々が物を考へると云つても、必ずしも同様の意味に於て考へるのではない。考へるといふことの最も根本的な形は判断である、判断の形に直し得るかぎり、概念的知識と云ひ得るのである。判断といふことは特殊が一般に於てあると云ふことを意味する。判断が成立するには、主語的なものを包む述語的一般者がなければならぬ。かゝる一般者の性質に従つて、種々なる意味の概念的知識が成立するのである。私の場所と名づけるものはかゝる意味に於ける述語的一般者を意味す

るのである、之に於て概念的知識の成立する一般者を意味するに外ならない。私はかゝる一般者を三層に區別することができると思ふ。先づ判斷的一般者即ち普通に一般者と考へられるもの、次には自覺的一般者即ち主語を自己の中に没却した述語的一般者普通に自覺的意識面と考へられるもの、終には自己自身を見るもの、於てある場所、即ち知的直觀の意識面とも考ふべきもの。

判斷的一般者といふのは主語となつて述語とならないもの、即ち個物的なるものを包むものを意味するのである、自己自身の中に特殊化の原理を含むの故に、普通に具體的概念と考へられるものである。かゝる一般者の述語面即ち場所が所謂客觀界と考へられるのである。我々の意識面と考へるものは、更にかゝる一般者を越えて之を内に包むものである。之に於てあるものは、主語となつて述語とならないと云ふ意味に於ても限定することのできないもの、個物をも越えたものである。自覺的意識面とは我々が私と考へるもの、於てある場所である。限定せられた一般者から出立して之を主語的方向に特殊化して行けば、その尖端は主語となつて述語とならないものに至つて窮まる。更に之を越えたものは、もはや前の限定せられた一般者に於てあると云ふことはできない。かゝる意味に於ての限定せられた一般者の

底に超越したものが私と考へられるものである。私の自己自身を見るものゝ於てある場所と考へるものは、右の如き自覺的意識面をも越えて之を内に包むものを意味する。判斷的一般者の底に超越したものが私と考へられるのであるが、眞に自己自身を見るものは、かゝる限定をも越えたものでなければならぬ、意識的限定を絶した所に眞の自己が見られるのである。

右の如き一般者の三つの層は、互に相獨立せるものではなく、一般の一般として相重なり、之に於てあるものは特殊の特殊として相續くものでなければならぬ。嚴密なる意味に於ての概念的知識は判斷的一般者が限定せられることによつて成立するのであるが、何等かの意味に於て場所が限定せられ、於てあるものが限定せられ得るかぎり、概念的知識が成立すると考へることが出来る。かゝる一般者の階段を逆にその根柢から見れば、自己自身を見るものゝ自己限定の階段と見ることが出来る。自己自身を見るものが最も具體的なるものであり、漸次抽象的となる、判斷的一般者に於て限定せられるものは最も抽象的なるものである。而して斯く根本的には右の三層に區別せられるが、その間に尙種々の中間層ともいふべきものを考へることが出来るのである。

一般概念とは自己によつて自己を限定し、限定せられた自己を含む場所となるものである。一般概念の一般と云はれる所以はその場所となるにあるのである。之に於てあるものはそれ自身によつてあるのではなく、互に他によつて媒介せられたものである。一般概念は自己自身を限定し、自己の中に媒介作用を含むものである。判断的一般者について云へば、判断がその限定作用となり、主語となつて述語とならないものがその最後の限定せられたもの、即ち最後の有るものとなる、かゝるものを包むものがその場所となるのである。判断的一般者に於てあるものは互に判断的關係によつて媒介せられたものであり、判断的一般者は媒介作用を含むものと云ふことができる。一般から特殊に對して限定作用であつたものは、特殊と特殊との間に於ては、媒介作用となるのである。

それで、自己自身を限定する一般概念は於てあるもの、即ち有るものと、此等のものを包む場所と、媒介作用とから成り立つて居る。併し特殊は更にその底の特殊に結合し、一般は更に一般に包まれるが故に、一般は自己の中に自己自身の限定面を有つ、場所は自己の中に自己自身直接の限定たる抽象面を含むのである。判断的一般者

に於ては、所謂抽象的概念と考へられるものがそれに當るのである。抽象的概念はその中に眞に主語となるものを含まない、自己限定の原理を含まない、従つて之に於てあるものは互に媒介せないのである。此故に判断的一般的の場所に於てあるものゝ述語的統一と考へられる。併し判断的一般者に於て含まれるものは、それが述語的に限定せられるかぎり、それに就いて判断的知識が成立するのである。判断的知識が一般者の自己限定によつて成立するといふ立場から云へば、場所自身の直接の限定が述語的たる抽象的概念であると云ふこともできる。而して概念が自己自身を限定することは特殊化することであり、特殊化することは主語的に限定することであるとするれば、それは又主語的に限定せられたものと云ふことができる。唯その主語的限定の極限に達しない、従つて判断的一般者が未だ自己自身に還らないものと見ることができるのである。判断的一般者にありては、尙場所自身の直接なる限定といふものが顯現的でないから、場所其者と限定せられた場所との對立が明らかでないが、判断的一般者の底に超越的なるものが見られ、意識面といふものが反省せられた時、一般者が自己自身に還つたと考へることができ、一般者自身の直接なる自己限定面と限定せられた一般者との對立が現れて來なければならぬ。判断的

一般的の一般者といふべき推論式的一般者に於て、既に小語面と大語面とが對立し、小語面は一般者其者の直接なる自己限定面に屬するものとして、大語面は之に於て限定せられた一般者と考へることが出来る。斯く二つの面が對立すると共に、媒介作用といふものも獨立の位置を取つて來なければならぬ、推論式に於て媒語といふものが獨立に考へられねばならない所以である。

一般者は一般者の一般者として、自己の中に直接なる自己限定面を含み、場所其者と限定せられた場所とが對立する時、媒介作用はその何の面に於てあるものに屬するかによつて、種々異なつた意義を有つて來る。判斷的一般者の底に超越するもの場所、即ち意識面に於てあるものに屬するものとして、それは知的作用といふ如きものとなる。直接に意識面に於てあるものは知るものであつて、知るといふことによつて互に相媒介するのである。意識面によつて裏打せられた一般者、即ち意識の限定面に於てあるものに屬するとしては、媒介作用は作用と考へられる。之に於てあるものは働くものであつて、働くことによつて相媒介するのである、而して働くもの、背後には知るものがあると云ひ得るのである。之に反し、單に限定せられた一般者に於てあるものに屬するとしては、媒介作用は物と物との關係と考へられる

外はない。一般者が未だ自己自身に還らない、従つて場所其者と限定せられた場所との對立が明らかでない判斷的一般者の如きものに於ては、一般者自身の限定として、於てあるもの相互の媒介作用といふ如きものが明らかにならない、云はゞ一般者の限定作用といふものが未だ對象化せられない。斯く一般者の自己限定たる判斷の底に働くものは見られないから、物とか作用とかいふものは却つて概念の外にあると考へられるのである。包む主觀即ち述語的一般者が未だ自覺せないから、於てあるものは唯主語的に限定せられた主語面に於てあるもの、即ち單なる客觀界に於てあるものと考へられるのである。判斷の對象界といふのは、未だ自己自身に還らない、即ち自覺せない一般者の場所を意味するのである、即ち判斷的一般者に於てあるものが判斷の對象となるのである。自己自身の限定すら尙潜在的なる抽象的一般者に至つては、於てあるものゝ間に媒介作用といふものがないのみならず、未だ判斷といふものすら現れない、於てあるものゝ間には單なる關係といふ如きものがあるのみである。

一般者が一般者に於てあると考へられると同時に、特殊なるものゝ底に特殊なるものがあると考へられねばならぬ、一般者が廣げられると共に、特殊なるものが深め

られるのである。於てあるものゝ意味が深められると共に、又於てあるものゝ媒介作用の意味が深められなければならない。

## 二

判斷的一般者の底に主語的に超越するものを見る時、即ち自覺的なるものを見る時、一般者は自覺的意識面にまで廣げられねばならぬ。併しかゝる意味に於ける意識面といふのは、尙判斷的一般者に即して考へられたものである、更にかゝる限定をも越えた時、眞の自己を見るのである、我々の意識我を沒した時、眞の自己が現れるのである。私はそこに至るまでの道行について考へて見よう。

概念とは自己の中に自己を限定するものである、かういふ意味に於て概念とは生きたものである。判斷的一般者に於ては、限定する一般者自身がまた限定せらるものとして、之に於てあるものは唯主語的方向に無限に遠く到達すべからざるものど考へられる。かゝる意味に於ける一般者の限定作用が單なる判斷と考へられるものである。併し一般者がかゝる自己自身の限定を越ゆる時、即ち一般者自身がかゝる意味に於て限定すべからざるものとなる時、限定作用は限定せられた一般者から、於てあるもの相互の限定作用に移つて行く、かゝる意味に於ける一般者の限定作用



が媒介作用となるのである。普通には、かゝる場合に於て、一般概念の包むといふ外延的意義が失はれると考へるのであるが、私は之を一般者自身が限定すべからざるものとなると考へるのである、述語面が超越的となると云ふのである。是に於て一般者が一般者自身に還り、有が無に於てあるとか、形あるものは形なきものゝ影とかいふ如き概念的限定の真相が現れて來るのである。斯く一般者の限定が於てあるものに移つた時、於てあるものが自己自身を限定するものと考へられ、判斷的述語は之に屬するものとして、かゝる述語的統一として抽象的一般者といふ如きものが考へられる。抽象的一般者は一面に於ては一般者の自己限定と考へられると共に、一面に於ては具體的一般者に於てあるものが互に相媒介する媒介面の意義を有つて居る、述語的限定の交叉面とも考へ得るのである。併し元來於てあるものゝ自己限定といふものは、超越的述語面自身の限定を意味するのであるから、かゝる意味に於ては、於てあるものゝ相互限定は一般者自身の限定として、所謂範疇的限定の意味を有つと考へることができらう。

一般者かものはや限定することのできないものとなり、之に於てあるものが自己自身を限定し、自己自身を媒介するものとなる時、先づ主語として自己自身を限定する

と考へることができ。一般者に於て限定せられるものは、先づ主語となるものでなければならぬ、即ち主語となつて述語とならない個物として、自己自身を限定するのである。而して物はその述語的屬性によつて、自己自身を媒介し、抽象的一般者に於て相交、又すると考へることができ。併し個物といへども、それが思惟せられ得るかぎり、一般者の外にあるのではない、唯限定せられた一般者の中にないと云ふまでである。一般者が一般者自身の自己限定に還つた時、個物も之に於てあるものでなければならぬ。かゝる立場からしては、かゝる一般者に於て自己自身を限定するものは、限定せられた述語が直に主語となるものと云ふことができる、即ち働くものと云ふことができる、働くものに於ては述語が直に主語となるのである。而して述語が直に主語となること云ふことは、主語として固定し得るものがないと云ふことを意味するのであるから、單に無限なる作用の連続といふ如きものが、於てあるものと考へられるのである、媒介するものなき媒介作用といふ如きものが、有るものとなるのである、斯くして單なる作用の世界といふものが考へられるのである。働くものを考へるには、所謂概念の外に出なければならぬ、矛盾を包むものゝ上に立たねばならぬ、否定の否定によつて働くものが考へられるのである、故に働くものに於ては

判断は既にその主語を失ふのである。

一般者が自己自身に還り、限定せられた述語が直に主語となる時、働くものが考へられるのであるが、於てあるものが更にかゝる一般者の限定をも破つて、主語的なるものが述語面の底に超越する時、それは知るものと考へられねばならない。向に判断的一般者の超越的述語面と考へられたものは、今は知るものが自己自身を限定する意識面とならねばならぬ。知るものを包むもの、知るものゝ場所といふべきものは、もはや判断的一般者といふ如きものではなくして、更にかゝる一般者をも包むものでなければならぬ。判断的知識から出立して主語が述語の底に超越するか、主語を失つた述語とかいふものは考へられないとも云ひ得るであらう。併しかゝる内面的超越を證するものは、我々の自覺の意識である、而して逆に判断的知識とは不完全なる自覺といふことができる。判断的知識の根柢には、いつでも自覺が潜在して居るのである、自覺によつて判断的知識が成立すると考へることができるのである。自覺といふことは知るものと知られるものと一である、知られるものが知るものである、知るものを知るといふことを意味する。かゝる意味に於ける知るといふことは、如何にして考へ得るであらうか。先づ知るといふことを一種の働きとして

考へて見るならば、前に云つた如く、働くものといふのは、判斷的一般者が一般者自身に還つた時、即ち一般者の自己限定が於てあるものに移つた場合に考へられるのである。併し一般者が一般者自身に還るといふ場合、兩者合一すると考へられるにしても、還る一般者と還す一般者とが區別せられなければならぬ。還る一般者に於ては働くものと云ふものはないのである、唯無限の働きがあるのである、働くものは還す一般者の方に見られねばならぬ。還す一般者が還る一般者を含むものとして、後者に於てあると考へられるものは力といふ如きものでなければならぬ。一般者の自己限定が於てあるものに移つて行く時、その限定が判斷的一般者の限定の意義を有するかぎり、その極限に於て力とか働くものとか云ふものが考へられるのである、即ち於てあるものが力として自己自身を限定するのである。單に判斷的一般者に於てあると考へられる個物が抽象的一般をその述語として自己を限定する如く、自己を自己に還す一般者に於てあるものは、一般者自身の限定を自己の限定とするのである。主語となつて述語とならないものに於て、特殊が一般に含まれると考へられる如く、限定せられるものがその極限に於て限定するものを含むのである。併し自己を自己に還す一般者即ち能働的一般者に於て、力とか働くものとか云ふもの

が考へられるとしても、尙働くものと働かれるものとが一である云ふ如きとは考へられない。働くものと働かれるものとが眞に一となるならば、それは働かないものでなければならぬ。かゝるものが考へられるには、判断的一般者の自己限定の意味を越えなければならぬ。判断的一般者を越えて之を包む一般者に於てかゝるものが考へられるのである。すべて自己同一なるものは、主語となつて述語とならぬ。個物の如く、或一つの一般者を越えて之を包む一般者に於てあるものとして考へられるのである。一般者に於て限定せられるものがするものであると考へられる時、既にその一般者の限定の意味が失れたと考へられねばならぬ。既に之を越えて居るのである。自己同一なるものは抽象的一般者の限定を越えて、而も之を包む一般者に於てあるものとして、前的一般者に於ける限定を基礎附けるものである。知るものは働くものでない、而も働きを基礎附けるものである。斯くして判断的一般者の自己限定から出立して、働くものと働かられるものとが一である云ふことによつて、自覺の考に到達することができ、働きの結果が働きを生むものを我と考へることができ、併しかゝる考は唯主語的方向へ押し進めた見方即ち對象化した見方たるを免れない。主語が述語に於てあるといふ判断的一般者の自己限定が

知るといふことであると云ふ考から出立して、限定することのできない超越的述語面即ち場所に近づくに従つて、限定作用が於いてあるものに移ると考へ得るならば、その極限に於て於てあるもの自身が一般者の自己限定の意義を有するに至ると考へざるを得ない。即ち於てあるものが判断の對象となるものではなくして、判断するものとならねばならない。判断的一般者を越えて之を内に包む一般者に於てあるものは、もはや判断の對象として知られるものではなくして、却つて判断的に知るものでなければならぬ。判断的一般者を包む一般者の自己限定は、知るものを知るといふことでなければならぬ。之に於てあるものは、自己自身を知るものでなければならぬのである。

判断的一般者に於てあるものが、その底に超越して、判断的一般者を包む一般者即ち自覺的一般者に於てあるものとなつた時、前の判断的一般者は之に於て如何なる位置を取るであらうか。於てあるものがその底に超越した時、前の一般者が消え去るのではない、單に消え去るならば、一般者が一般者を包むといふ意味はなくなる。前の一般者はその性質を有すると共に、それが更に大なる一般者に於て包まれるものとして、異なつた性質を有つて來るのである。判断的一般者に於てあるものは判

斷の主語となるものである、廣義に於ける物といふ如きものである、抽象的一般者に於てあるものはその述語となる。判斷的一般者が自己自身に還つた時、之に於てあるものは働くものとなる、述語的なるものが直に主語となるのである。此までは尙主語的有といふことができるが、判斷的一般者を越えてあるものは、働くといふ意味に於ても、主語的有として限定することのできないものでなければならぬ、而も働くことによつて自己自身を判斷的に限定するものでなければならぬ。判斷的一般者を包む一般者に於てあるものは、判斷的一般者の限定を越えたものとして、如何なる意味に於ても範疇的に限定することのできないものであると共に、而も之を離れたものではなく、判斷的一般者に於ける限定を自己限定の手段となすものでなければならぬ。判斷的一般者に於てあるものは、すべてその背後にあるもの、自己限定の意義を有し、判斷的一般者の超越的述語面はその背後にあるもの、影を映す射影面と考へられねばならぬ。かゝるものを我々は我々の意識面と考へるのである。我々の意識面とはその背後にあるものに即して考へられた判斷的一般者の述語面と考へることが出来る。此故に意識面に於てあるものは作用として一種の有と考へられると共に、有と考へられない非有的對象を志向すると考へられねばならぬ、即ち

志向作用と考へられるのである。前に云つた如く、働くものに於て既に述語的なるものが主語となる、述語的限定が直に主語的限定となる。併しかゝる意味に於て限定せられた述語的なるものが、主語的有としても限定することのできない、却つてその底に超越する内在的超越者の自己限定と考へられる時、それは意識有となる、述語となつて主語とならないものと云ふことができる。作用としての意識の概念は以上述べた如くにして成立するのである。その背後にある自己限定を除去して考へれば、意識面は所謂中和面となる、單なる意識面の特徴としては、内在的に超越するものを映すといふことでなければならぬ。

判斷的一般者を包む一般者に於てあるものは、判斷的に自己自身を限定するもの、即ち判斷するものでなければならぬ。而して主語が述語に於てあるといふことが知るといふことであるとするれば、それは勝義に於て知るものといふことができる。知るものは判斷的一般者の場所をその意識面となすものである、之れに於てあるものは意識作用と考へられる。種々なる知的作用は判斷的一般者に於ける種々なる限定によつて區別せられるのである。例へば判斷的一般者の中には、媒介を含まない抽象的一般者といふ如きものが含まれねばならぬ。かゝるものが意識面として



考へられるならば、知覺的意識面といふ如きものとなる。かゝる考へ方によつて、判斷的意識以下の意識をも考へることが出来る。又判斷的一般者の意味を推論式的一般者にまで廣げるならば、更に種々なる知的作用を考へ得るでもあらう。判斷的意識といふのが判斷的一般者其者の自己限定として勝義の知的作用と考へられるのであるが、判斷的意識といふのは尙判斷的一般者に即して考へられたものに過ぎない。判斷するもの即ち知るものは、判斷的一般者を包む一般者に於てあるものとして、知ることを知るものでなければならぬ、即ち自覺的なるものでなければならぬ。普通には知るものを對象的に考へるから、知るものと自覺とは異なる如く考へられるのであるが、眞に知るものは自覺其者でなければならぬ。判斷的一般者を包む一般者は自覺的一般者といふことができる。知るものといふのは、向に云つた如く、判斷的一般者の述語面を意識面として、之に現れる意識作用を自己自身の限定となすものである、意識的に作用することによつて、自己自身を限定するものである、所謂知つて働くものである。そこには既に意志の意味が含まれて居なければならぬ。意識面は何處までも知るものを含むことはできない、抽象的一般者が主語となつて述語とならない個物を含むことができないと一般である、個物は超越的でない

ければならない。併し抽象的一般者を包む具體的一般者に於てある個物の立場から云へば、抽象的一般者に於てあるなるものは、その述語として之に屬するものであり、何處までも部分的なる限定と考へられねばならない如く、意識作用は知るものに屬するものとして而もその不完全なる自己限定と考へられねばならない。個物的主語が述語的なるものに對して、超越的なる或物と考へられる如く、知るものは意識作用に對して超越的にして自由なるものと考へられねばならない。類の中に種を考へ、之に種差を加へて行つて、その極限に於て個物といふものを豫想することもできるであらう。併し斯くして個物といふものを考へると、之を主語となつて述語とならないものとして考へるとは、既にその立場が異なつて居なければならぬ。前者は抽象的一般者の立場から、之を超越することによつて考へたのである、後者は既に判斷的一般者の立場に立つて、之に於てあるものとして考へるのである。種差として考へられるものと、述語として考へられるものとは、その内容が同じであつても、異なつた性質のものでなければならぬ。後者は個物的なるもの、自己限定の意味を有するのである、かゝる意味に於て述語的なるものは單に種差的なるものとして抽象的一般者に含まれるよりも廣いのである。動詞的述語といふ如きものも、

種差としては考へられないとしても、主語的なるもの、自己限定として述語的意義を有すると考へることが出来る。判断的一般者から出立して、之を超越することによつて、知るものが考へられるとしても、既に知るものと考へられた時、それは判断的一般者の一般者、即ち自覺的一般者に於てあるものとして考へられるのである。判断的一般者の述語面がその自己限定面として、意識面と考へられるとしても、意識面は判断的一般者の場所といふより廣い意味を有つたものである。意識作用は單に知的作用のみではない、意識作用を自己の限定作用となすものは、單に所謂知るものではなく、意志するものでなければならぬ、眞に自覺的なるものは意志するものでなければならぬ。

知るものとは、知ることによつて自己自身を限定するものである。知るものを自己の限定として之を包む一般者は、知るものを知る自覺的一般者でなければならぬ、之に於てあるものは、すべて自覺的なるものでなければならぬ。自覺の根柢には、意志が含まれて居る、眞の自覺は自由意志になければならぬ。判断的一般者に於てあるものが抽象的一般者を越えて、自己自身の場所に於てあるものとなるに従つて、即ち一般者が自己自身に還るに従つて、於てある自身が判断的に自己自身を限定し、互

に相媒介するものとなる。と考へられる如く、自覺的一般者に於てあるものが、その抽象的意識面を越えて之に於てあるものとなるに従つて、即ち自覺的一般者が自己自身に還るに従つて、於てあるものは自覺的に自己自身を限定し、互に相媒介するものとならねばならぬ。眞に自覺的一般者の超越的場所に於てあるものは自由意志でなければならぬ。自覺的一般者に於てあるものは、意志作用によつて自己自身を限定し、互に相媒介するのである。向に判斷的一般者の場所を超越することによつて考へられた意識面、云はゞ裏から見られた判斷的一般者の場所とも云ふべきものは、於てあるもの即ち自己の各に屬するものと考へられると共に、各自の意志の媒介面とも考へることが出来る。恰も個物に屬する述語的なるもの、統一面として、判斷的一般者に於て抽象的一般者が考へられると一般である。斯くして我々は意志の對象界といふ如きものをも考へることが出来るであらう。

以上述べた所は、判斷的一般者から出立して、之に於てあるもの、意味を深め、遂に自由意志にまで至つたのであるが、これ以上は判斷的一般者の基礎に於て考へることではできない、所謂概念的知識の範圍を超越するの外はない。單に對象的に考へるならば、一般者の一般者の上に更にその一般者といふ様なものが考へられるかも知

れぬが、かゝる考へ方を幾度繰り返しても、同じ一般者の外に出ることはできない。自覺的一般者と云つても、單に一般者の上に考へられた一般者といふのではない、主語的超越に反して、述語的超越によつて考へられたものである、而してかゝる超越は我々の自己意識によつて直接に與へられたものである。意志までは尙意識せられた意識の領域に屬するものとして概念的知識に屬するものと云ひ得るでもあらう、之を越ゆれば、もはや主語述語の關係によつて方向づけることもできない。然らば如何にしてそれ以上のものを考へることができらうか。何故に我々は自覺的一般者をも越えて、更に眞に自己自身を見るときいふ如きものを考へねばならぬであらうか。意識面といふのは、判斷的一般者の底に超越者が考へられたものであつて、意識面に於てあるものは、同時に判斷的一般者に於てあるものであるが、それは判斷的一般者によつて限定せられるものではなく、その背後にあるものゝ自己限定と見らるべきものである、云はゞ背後にあるものゝ影像である。此故に意識作用はすべて志向的である。意識面に於てあるものは何等かの對象を志向せなければならぬ。志向作用の對象となるものが、同時に志向作用を限定する意義を有する間は、それは自覺的なるものに屬するものとして、その根柢にあるものは、尙前に云つた如

き自覺的一般者に於てあると云ふことができる。之に反し意識面に於てあるものによつて志向せられるものか、もはや作用的限定の意義をも超越したものと成る時、それはもはや自覺的一般者に於てあるものとしても考へられない、従つて意識面に於てあるものは單なる符號とか象徴とかいふ如きものとなるの外はない。一面に判斷的一般者の述語面たる性質を有する意識面に於て現れる象徴意識によつて、自覺的一般者をも越えたもの、即ちイデヤの世界ともいふべきものを知ると云ふことができる。無論かゝるものを包む一般者といふ如きものは如何なる意識に於ても限定し得られるものではない。併し象徴意識といへども、意識面に屬するものとして、志向的性質を有し、従つて一般者の自己限定といふ性質を有するものとして、自覺的一般者をも越えた一般者といふ如きものを考へ得るのである。

### 三

以上述べた如く、述語的超越によつて、判斷的一般者が自己自身を越えて自覺的一般者に至り、象徴的意識によつて更に自覺的一般者が自己自身を越えて自己自身を見るものゝ於てある場所に至ると考へることができる。象徴的意識はいふまでもなく、表現的意識によつて志向せられるものは、既に自覺的意識の外にあるものでな

ければならぬ、表現的意識によつてもはや意識が意識自身を超越すると云ふことができる。自己自身を表現するものゝ立場から云へば、我々の意志的作用即ち行爲も一種の表現作用と考へることができらう。自覺的なるものが意志作用によつて自己自身を限定するとは、その底にあるものが自己自身を表現することである。自己自身を表現するものが、尙自覺的一般者の場所に於てあるといふ意味を有する時、意志的作用と考へられるのである。行爲は一面に於て、表現的自己に屬すると共に、一面に於ては、自覺的自己に屬するのである。

意識の本質を志向性に置いて考へるならば、志向せられるものが志向するものである時、知的自覺が成立する、かゝる意識の範圍内にあるものは自己に内在的と考へることができらう。併し主語的なるものが述語面の底に超越することによつて考へられる意識の志向性を追うて、志向するものに到達せない無限の志向といふものを考へることができらう、否それは意識の事實でもある。知的自覺といふのは、述語の中に主語が没入するといふことによつてのみ考へられるに過ぎない。我々はかゝる自覺を越えて無限に自己自身の内に志向する、而もその志向するものに到達せない意志的自覺といふものを考へることができらう。意志するものは知的自覺の中に入

れ來らない、判斷的一般者に於てある主語となつて述語とならないと同様の意味に於て、超越的である。併し意志するものは、尙志向するものが又せられるべきであるといふ意味に於て、自覺的一般者に於てあるものである。眞に述語的超越の意味を徹底して行けば、志向するものなき志向作用に到達することができる、意識するものなき意識の考に至らなければならぬ、自覺的意志としての主語的なるものも消え失せるのである。此の如き志向性を有するものが我々の表現的意識である、自己自身を表現するものは自覺的意志をも越えたものでなければならぬ。先に判斷的一般者の述語面として客觀界と考へられ、次に主語的なるものゝ内面的超越によつて意識面と考へられたものは、今は自己自身を表現するものゝ表現の場所となる。表現的意識に於て現れるものゝは、意識的自己の意識面に屬するのではない、意識することなくして意識する自己の意識面に屬するのである、見ることなくして見るものゝ視野に於てあるのである。

自覺的意志が自己自身の立場を越えて、自己自身を表現するものとなる時、先づ行為的自己となる。是に於て向に意識面と考へられたものは、意志實現の場所となる、之に於て現れるものは單なる意識の事實ではなくして意志實現の過程となる。か



へる考へ方を進めることによつて、我々は所謂客觀的精神界といふ如きものを考へることができらう。一般者の述語面が意識面と考へられるに先だち、合目的的世界即ち意識面によつて裏打ちせられたる客觀界といふ如きものが考へられるのと一般である。而して一般者が無限に自己自身に還るといふ意味に於て何處までも動く世界と考へられるのである。すべて一般者の場所の底に超越的なるものが考へられた時、所謂主觀と客觀との對立が成立する、內在的超越者が主觀と考へられ、之に對して前の場所が客觀界と考へられるのである。自覺的意志が自己自身を超越するといふ時、我は我自身を失うて表現的自己となる、かゝる自己に對するものが客觀的精神界である、我なき我に對するものが客觀的精神界である、表現的意識によつて裏打ちせられた世界である。併し此の如き意味に於て主客對立の世界は、尙眞に自覺的意志が自己自身を越えた世界ではない。眞に自覺的一般者を包むものに於ては、志向するものと志向せられるものとの對立といふ如きことが失はれるのみならず、表現するものと表現せられるものとの對立をも失はなければならぬ。表現意識には表現するものと表現せられるものとの對立が含まれねばならない。かゝる意識の根柢となるもの即ち自己自身を表現するものは、かゝる對立をも越え

たものでなければならぬ。私はかゝるものを自己自身を見るものと名づけるのである。それに於ては意識せられるものと意識するものとが一となるのである。それは聞くことなくして聞き、見ることなくして見るのである。此にある一枚の畫が何物かの形を映すとすれば、その意識は志向的と云ひ得るであらう。併し藝術的直觀に於ては我々物其者を見て居るのである、その意識は何物かを志向し、何物かを表現して居るのでない。かゝる考を推して自覺的意志の底にも自己自身を見るものを考へることができ、それが所謂睿智的性格とも考へられるものであらう。

それで自覺的一般者を越えてあるは自ら無にして自己自身を映すものと云ふことができる。自覺的一般者に於て、既に主語的なるものが意識面の底に没入し、自己自身を映すものと考へられる、それが所謂志向作用である。併し自覺的なるものに於ては、自己自身を映すもの、自己自身を限定するものとして、尙全然主語的なるもの意義が失はれない。唯我々は表現的意識によつてかゝる限定を越えたものをも考へることができるのである。而して自覺が自覺自身を失つた時、それは自ら無にして自己自身を映すものと云ふの外はない、見ることなくして見るといふの外はない、眞のイデアの世界とは此の如きものゝ世界でなければならぬ。それは最も深き

意味に於ての知的直觀の世界である、之に於てあるものはすべて睿智的存在ならざるはない。意識面に於て見られる象徴的志向によつて考へられるかゝる世界も、意識面其者が述語面的性質を有するの故を以て、尙自覺的一般者を包む一般者として考へ得るならば、之に於てあるものは知的直觀によつて限定せられるものと云ひ得るでもあらう。かゝる限定の極限に於てあるものが意志的自覺の底に見られる睿智的性格である。

#### 四

知的直觀の一般者ともいふべきものが、自覺的一般者を超越して、而も之を内に包むと云ひ得るならば、我々の自覺的意識面に於て、表現的意識はいふまでもなく象徴的意識といふ如きものも成立することを理解し得るであらう。我々の自覺的意識面に於て現れ來るものは、すべて自覺的自己を越えてあるものゝ影像といふことができる。我々の意識の本質を表象性に置いて考へるならば、我々の意識内容はいつでも直に客觀的内容表現と結び付く性質を有つと考へることができる、廣義に於ける言語と結合する性質を有するといふことができるであらう、言語は我々の意識の客觀的内容を宿すものである。併し一般者が更に之を越えた一般者の内に包まれ

る時、於てあるものは自己自身を越えてその底にあるものに接續する。自覺的一般者の超越的述語面に於てある自覺的意志が、自己自身を越えて自己自身を見るものに至る時、自己は一方に於て既に一步を知的直觀の場所の中に歩み込んだものとして、イデヤ其者を見て居ると共に、尙自覺的意志の意義を存するものとして、客觀的精神の對象界を見て居る、即ち自己の對象界として文化現象界を有つのである。

自覺的意志が自己自身を越える時、先づ行爲的主觀として我々の意識に現れるものが客觀的精神界と考へられるが、更に深くイデヤがイデヤ自身を見るときいふ立場から、翻つてこれまで種々なる一般者に於て限定せられた有の世界を見るならば、此等の世界はすべてその存在の意義を失つて、イデヤに従つて構成せられたる認識對象の世界となる。自然界から歴史の世界に至るまですべてが認識の對象界となる。かゝる立場の主觀が眞の認識主觀でなければならぬ。かゝる立場の主觀から見れば、先に判斷的一般者によつて限定せられた世界も、次に自覺的一般者によつて限定せられた世界も、同じく一つの主觀の對象界となる。判斷的一般者によつて限定せられたものとしては、所謂自然界の如きものが成立するが、判斷的一般者は自覺的一般者に於て包まれたものとして、認識主觀の意味が深められて行くに従つて、合目

的世界から文化現象界までも、之によつて構成せられると云ふことができる。認識主觀の構成といふのは、イデヤ自身を見るものが自己自身を限定することである。かゝる主觀は云ふまでもなく判断的一般者に於てあるものでもなければ、所謂意識的自己として自覺的一般者に於てあるものでもない、かゝる意味に於ては全く存在の意義を超越したものである。それは唯自己自身を見るものとして、知的直觀の一般者に於てあるのである。而してその限定たる自覺的意識面からは、認識構成の主觀と考へられるのである。併し認識主觀といふのは知的自覺が判断的一般者に於て有する如き位置を知的直觀の一般者に於て有するものに過ぎない。知的自覺の底に意志的自覺があると考へられる如く、かゝる方向を進めることによつて我々は眞に意志自身を見るものに到らねばならぬ。かゝるものを意識の立場から見た時、道德的主觀と考へられるであらう。

以上述べた如き立場から感情を如何に考ふべきであらうか。判断的一般者が自己自身の限定に還つた時、働くものとなるが、その限定面たる抽象的一般者の立場から判断の一般者の場所に於てあるものを見れば、主語となつて述語とならないもの

として、物と考へられる、而して述語的なるものはその性質と考へられる。判斷的一般者の超越的述語面が意識面と考へられた時、その底に超越する主語的なるものは自己と考へられる、自己とは自覺的一般者の自己限定面たる意識面を越えたものである。自己が意識面を越えて尙之に即すると考へられる時、知的自己と考へられ、自己が自己自身を越えて知的直觀に接する時、意志的自己と考へられるが、その中間に於て情的自己といふものが考へられるであらう。情的自己とは恰も判斷的一般者に於ける物の概念に相當するのである。かゝる意味に於ける自己の状態が苦樂の感情と考へられるのである。種々なる情緒は、自覺的一般者に於てある我々の意識的自己的内容を、最も能く現すものと云ふことができる。併し感情や情緒について又知的直觀に於てあるものについての詳論は後日の論文に譲ることとする。